

組 番 氏名

問1 読解段階で線を引いた箇所に注目し、内田論と宇野論の核心部分を確認しよう。

内田 樹 「紙の本はなくなる」
● 紙の本はなくなる。
➤ 電子書籍では全体を（ 俯瞰する / 鳥瞰的に見る ）ができない。
◇ ページ数の（ 厚み ）が（ 身体実感で／感覚的に／身体的に ）わからない。
➤ 電子書籍では（ 宿命的な / 運命の出会い ）が起こらない。
◇ 紙の本には固有のオーラがある。
◇ 電子書籍は（ 偶然 / たまたま ）手に取ることがない。

宇野常寛「情報化と紙の本のゆくえ」
● 言葉を通じて知を共有する文化は変わることがない。
● （その一方で） 情報化の進行は、人間と言葉の関係を本質的に変化させる。
➤ 紙の本自体が更新を迫られている。

問2 二人の論は、表面的には対立する。以下にまとめてみよう。

内田	宇野
読書は紙の本でしかできない。 身体性が必要。	紙の本の役割は変わらざるを得ない。 骨董品のようなものになる。

問3 内田と宇野が共通して望んでいることは何だろうか。

本と人間をより深く考え直すこと。

問4 二人の考えを活かして、『より良い読書』を実現するには、どうすればよいだろうか。

_____組 _____番 氏名_____

問1 読解段階で線を引いた箇所に注目し、内田論と宇野論の核心部分を確認しよう。

佐藤理史 「コンピュータが小説を書く日」
● 擬人化をやめれば、機械が意思を持つという心配をする必要はなくなる。
➤ (擬人化) 表現に日常的に接しているために、コンピュータが (人間) のようなものとして認識されている。
● 「創造性」の有無は、人間とコンピュータを区別する基準にならない。
➤ 「創造性」は結果を表す言葉に過ぎない。
☆ 一つの能力を突き詰めたところに「創造性」と呼ばれる境地がある。
➤ だから、結果的に素晴らしい作品を作れば、コンピュータも創造性があると見なされる。

岡田美智男 「〈弱いロボット〉の思考」
● 人間とロボット掃除機は連携して掃除を行っている。
➤ 互いの〈強み〉を生かし、〈弱み〉を補完しあう。
☆ ロボット掃除機は床のホコリを吸い集め、人間は障害物を取り除く。
● 共同行為を生み出すポイントは二つある。
➤ 自らの状況を相手にも参照可能なように表示（開示）する。
➤ 相手に対する〈敬意〉や〈信頼〉を持つ。
● 人間もロボットも (不完全さ／欠点・欠陥) があるために、連携の発想が生まれる。
➤ 完璧を目指すと連携する必要がなくなり、結果的に (相手への要求水準) が上がってしまう。

問2 二人の論は、表面的には対立する。以下にまとめてみよう。

佐藤		岡田
機械の擬人化はすべきでない。 (機械は道具)	⇄	機械と人間は補いあって共生しよう。 (機械は共生する相手) 【共生するなら擬人化は不可避】

_____組 _____番 氏名_____

問3 人間による機械の利用について、二人が共通して重視していることは何だろうか。

佐藤論	機械が意思を持つわけがない（道具に過ぎない）と理解した上で使っていこう。
岡田論	機械の得意なことは任せ、苦手なことは人間がやることでより効果的に使っていこう。



共通点	感情や意思を持つという誤解をせず(佐)、機械の得手不得手を明確に認識しよう(岡)。つまり、機械の本質的な特性を理解した上で、適切に活用していこう。
-----	---

問4 二人の考えを活かして、機械をどのように活用していけばよいか。学校生活や日常生活の中から具体例を挙げて説明しよう。